平成七年一月三日（火）

郷土研究会　資料

第二一六回　史跡めぐり

日本橋七福神を訪ねる

主催　越谷市郷土研究会

第二一六回　史跡めぐり　案内

日　時　平成七年一月三日（火）

集　合　越谷駅東口　午前九〇〇分

行　先　日本橋七福神を訪ねて

コース　越谷駅ー北千住駅ー小伝馬町駅

宝田恵比寿神社（恵比寿）ー杉森神社（恵比寿）ー小網神社（福禄寿・辨財天）ー笠間稲荷神社（寿老人）ー末廣神社（毘沙門天）ー松島神社（大黒神）ー茶の木神社（布袋尊）ー水天宮（辨財天）　……（解　散）

人形町駅ー北千住駅（又は浅草駅）ー越谷駅

番外訪問予定地　…石町の鐘・於竹大日如来遺跡・歌舞伎町跡・玄冶店跡・元吉原跡

案内者　副会長　山田　政信

参加費　金一〇〇〇円　（交通費・資料代・保険料・その他）

七福神信仰

種々の福徳を授けてくれるとして庶民に信仰される七福神。ほぼ現行の七福神の形態ができたのは、中世室町時代といわれる。恵比寿や大黒など個別の「福の神」に対する現初的な信仰は行われていたが、これが次第に発展して、南北朝時代の仏画の中には、現在見られるような姿の、大黒、毘沙門天、弁財天などが登場してくる。こうした状況の下で室町時代に、経典の「七難即滅、七福即生」による聖数「七」に基づき、また当時好まれていた「竹林の七賢」などにならつて七体の神が組み合わされたものと考えられる。

このように、七福神の体系は、室町時代、京の町衆文化の中で形成されたといえるが、その背景には、中世末になり町人生活の中で蓄財観念が生まれ、福徳という現世利益を求める意識が生じたことがあげられる。これが商業の発達をみた近世江戸時代になると、福徳授与の神としての七福神信仰が盛んになり、ことに天明年間（一七八一～八九）には、「七福神詣で」と称して、正月元旦から七日までに一年の幸福を祈つて七福神を祀つた社寺を巡拝することが流行し、以後年中行事的に行われるようになる。

【宝田恵比寿神社】（恵比寿）

もと宝田村（皇居前広場付近）の鎮守で、馬込勘解由が徳川家康から受けた恵比寿神を祀ると伝えられる。毎年一〇月一九日、付近の道路で浅漬大根を売る（べったら市）が有名である。「東都歳時記」等によれば、江戸時代末までは、商家で商売繁昌を願って恵比須神を祭り、関係者をよんで祝宴を開く夷講の用具（小宮・三方・小槌・まな板など）等の市であったものが、明治中期以後、主として浅漬大根の市に変わった。

【杉森神社】（恵比寿）

「江戸砂子」には、寛文（一六六一～七三）のころまでは町人小針某屋敷内の稲荷の小社であったが、延宝七年の火災にこの社のみが残り、皆これを奇とし、新たに蛭子と姫太神を相殿に祀った。

祭神は稲荷大神・恵比寿神の二柱で、市を立てた時に、市の守護神として仰ぎ、商売の神、福徳の神とあがめたことにはじまるといわれています。

拝殿の左手に「富塚」と刻んだ石碑が立っている。

【小網神社】（福禄寿・弁財天）

社伝によれば、小網山万福寺を別当寺として、室町時代中期、当地に祀られた稲荷社に起源するという。稲荷社は、明治時代初めの神仏分離令により、小網神社と称し、東堀留川の河岸地の一画であった現在地を社地と定めた。そして現在、小網町及び人形町の一部の氏神として、また東京下町に広く信仰を集めている。

境内には、昭和四年の造営による社殿及び神楽殿が残っている。社殿は伝統的な神社建築の形式を備え、向拝には優れた技法による昇り竜、降り竜、獅子、ばく鳳凰等の彫刻がほどこされている。また道路際に建つ神楽殿、五角形という特殊な平面形態を持つ。この社殿及び神楽殿は、中央区に現存する数少ない木造の神社建築として、棟札等の造営に関する資料とともに、中央区民文化財に登録されている。

【笠間稲荷神社】（寿老人）

社の沿革によると、江戸時代中期、笠間藩の江戸藩邸内の屋敷神として、常陸の笠間稲荷神社の御分霊を祀ったのがはじまりであるという。五穀・水産・殖産の守護神として信仰されてきました。

【末廣神社】（毘沙門天）

社の沿革に、江戸時代の初期に吉原（当初葭原と称した）がこの地にあった当時（元和三年から明暦三年まで）その地主神産土神として信仰されていました。明暦の大火で吉原が移転してからは、その跡地の難波・住吉町・高砂町・新和泉町の四ヶ所の氏神として信仰されていました。

社号の起源は、延宝三年社殿修復のさい年経た中啓（扇）が発見されたので氏子の人達が悦び祝って末廣の二字を冠したものです。

【松島神社】（大黒神）

社の沿革によると、鎌倉時代の元亨（一三二一）以前、この辺り入海であっ（た）ころ、小島があり、夜毎かかげる灯火を目標に舟人が航海の安全を得たと伝える。島内に松樹鬱蒼たるにより、人々松島稲荷大明神と唱える。

正徳三年（一七一三）新町が開設されるに、社号に因んで、松島町と称した。当時付近を埋め立て、武家屋敷の造営のため、各地から技をもつ人々が集まり、それぞれの故郷の神々の合祀を頼んだので、十四柱という御祭神の多いお社である。

【茶の木神社】（布袋尊）

社伝によると、祭神は倉稲魂大神（伏見系）で、徳川時代三千坪に及ぶ下総佐倉の城主大老堀田家の中屋敷の守護神として祀られてあった。社の周囲に巡らされていた土堤の芝の上に丸く刈り込まれた茶の木の緑が見事であった。そして永年屋敷及び周囲に火災がおこらなかったので、だれ云うとなく火伏の神と崇められた。堀田家では年一日初午の日の当日だけ開門して、一般の参拝を自由にされた。「お茶の木様」として評判であった。

以上は堀田家の老女として仕えた人の身内で、下総関宿の人故沢田恵吾氏より語り継がれた話である。

昭和六十年、布袋尊を御遷座して日本橋七福神の一になる。

【水天宮】（弁財天）

当社は文政元年港区赤羽に在った有馬藩邸に当時の藩主有馬頼徳公が領地（福岡県久留米市）の水天宮の御分霊を藩邸内に祀らせたのが創めです。久留米の水天宮は今からおよそ七百年程前に創建されたと伝えられております。壇之浦の戦で敗れた平家の女官の一人が源氏の目を逃れ久留米付近に落ちのび、一門と共に入水された安徳天皇、建礼門院、二位の尼の御霊をお祀りしたのが創めです。江戸時代の水天宮は藩邸内に在ったため、庶民は普段参拝できず門外より賽銭を投げ参拝したと言います。ただし毎月五日の縁日に限り特別の計らいにより藩邸が解放され参拝が許された。その当時参拝の妊婦の人が鈴之緒のおさがりをいただいて腹帯として安産を祈願したところ非常に安産だったことから御利益が広まりました。明治維新により有馬邸が青山に移ると共に青山へ、明治五年現在の蛎殻町に移る。

エビスとべったら漬

東京のエビス講といえば、あのべったら市、これわエビス祭りの市に合わせて旬のものである大根をメインにした市であった。大根を麹にしばらくの間漬けて食べると、甘みの漬け物となる。以前は日本橋の大伝馬町から小伝馬町にかけての通りに所狭しとべったら市が立った。もちろん大根だけでなく、塩鯛やエビスや大黒の神像、膳椀、食器類も並んでいたが、とくにべったらの大根にシンボリックな意味がこめられていた。というのは麹がついたままの大根を市の若者がふりまわし、通行する若い女性たちになすりつけようとする所作がともなっていたからである。大根は昔から豊穣を表す呪具であり、二股大根などは性器崇拝の対象となっていたのである。若い女性たちにべったりつくのでべったりの呼称が生じたという説もある。大根は男根に通じており、呪術の一種とみなされよう。

日本橋宝田恵比寿や浅草寺の稲荷境内の恵比寿がそれぞれ開帳されている

宮田　登

東京民族誌　十二ヶ月　ヨリ

絵本江戸風俗往来　ヨリ

七福神

寿老神

弁財天

毘沙門天

恵比須

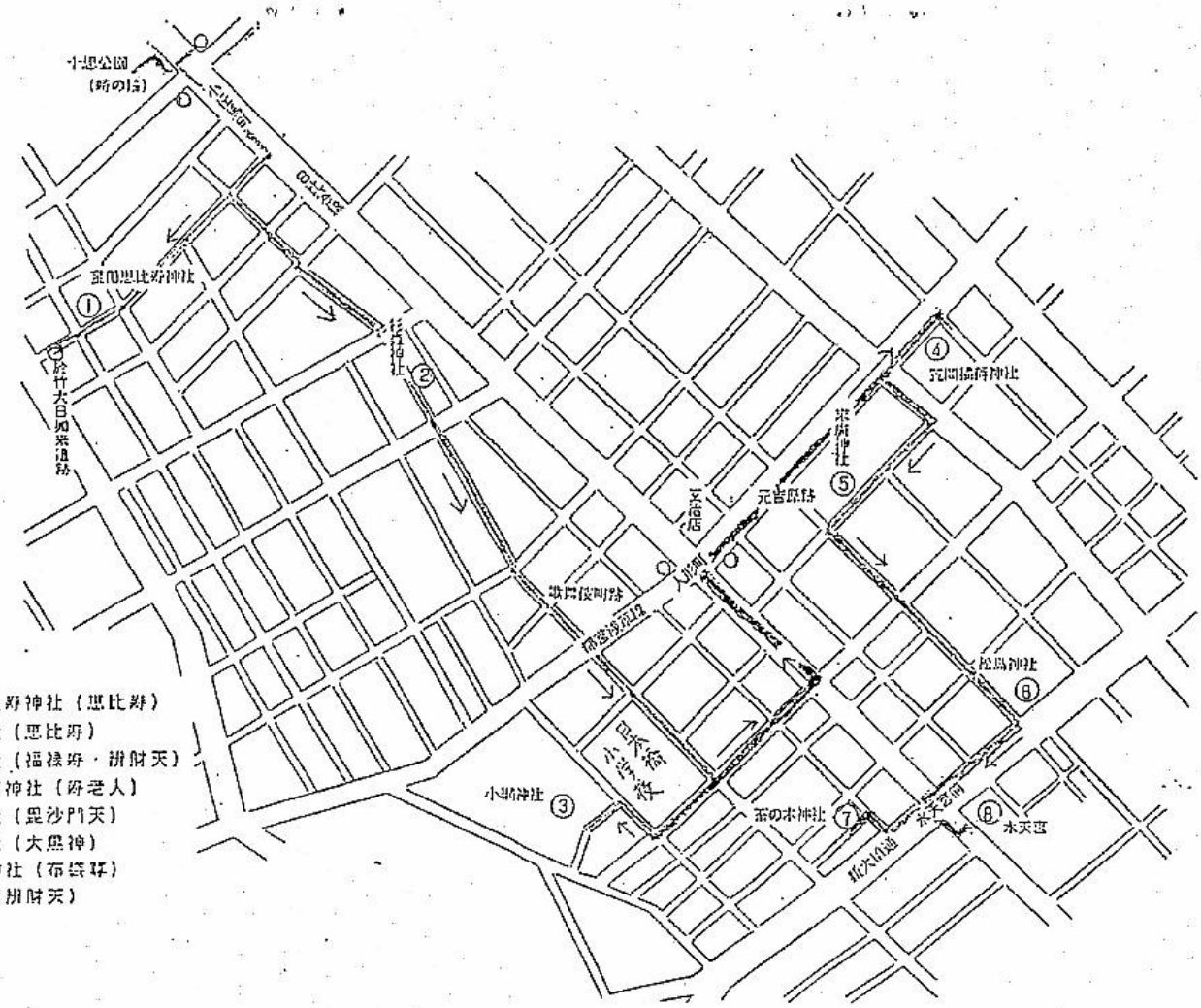
大黒天

福禄寿

布袋尊

七福神めぐり

日本橋



①宝田恵比寿神社（恵比寿）
②杉森神社（恵比寿）
③小舟橋神社（福禄寿・弁財天）
④笠間稲荷神社（寿老人）
⑤茶所神社（毘沙門天）
⑥松島神社（大黒神）
⑦茶の木神社（布袋尊）
⑧水天宮（弁財天）